2024河合塾文化講演会シリーズ

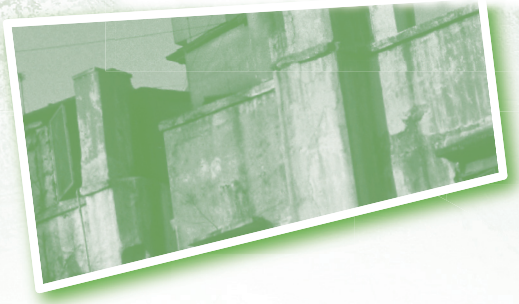
他者の語りを聞いて書く

災禍の記憶を訪ねて

日本は災害の多い国である。近いうちに必ず大震災がやってくると予想されている。もちろん、物理的な備えも必要だ。しかし、人間の想定を超えて生じるのが災害である。災害に遭った暁には、物質的な生活を立て直すことが喫緊の課題だ。しかし、当座の生活を凌いだ後は、いかにして災害以後を新たに生き直すのか、という課題が迫って来ることだろう。

瀬尾夏美さんは、2011年、東京の地で東日本大震災に直面したことを契機に、当事者の語りを聞き、記憶を掘り返し、アートという仕方を交えて表現する活動を始めた人である。講演会では、これまでの瀬尾さんの活動を紹介してもらいながら、災禍を語ることの意義、問題等について、話してもらいたいと思う。

（現代文科講師　奥村 勇一郎）



阪神淡路大震災から29年、東日本大震災から13年が経過した。そして、2024年元日には能登の震災が生じた。今年はその後も、宮崎や香川・愛媛で大きな震度の地震が続けて起こっている。災害の話題は、一時は世の中を席巻するが、あたかも流行品のように、時が過ぎれば表舞台から消え去る。災害の語りまでもが資本主義社会の中で消費されるような時代において、そうした皮相な語りに回収されない形で、災禍の歴史・記憶を掘り起こし、語り、伝えることは大きな意義を持つだろう。その語りは、当事者が新たな日常を始める支えにもなるし、当事者になりうる私たちが災禍に直面した際、どう生き抜くかを考えるためのよすがにもなる。もちろん、そこには、安易に語る（表象する）ことの危うさもつきまとう。少なくとも直接的な当事者ではない人が、災禍をめぐる声を聴き取れるのか、代弁してよいのか、といった問いはたえず立ち上って来る。そうした問いまで含めて、人々の語りを聞き、それを語り伝えることについて、考えを巡らせてみたい。

講演者プロフィール

瀬尾（せお） 夏美（なつみ）

1988年、東京生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻修士課程修了。土地の人々の言葉と風景の記録を考えながら、絵や文章の創作に励んでいる。東日本大震災におけるボランティア活動を契機に、2012年から3年間陸前高田市で暮らす。災禍の歴史を掘り起こし、人々の語りを記録し、伝える、という活動を続ける。現在は東京都在住。映像作家との共同制作や、記録や福祉に関わる公共施設やNPOなどとの協働による展覧会やワークショップの企画も行っている。また、「カロク」（＝災禍の記録）を探し、伝えるネットワークの場「カロクリサイクル」を立ち上げ、活動を行っている。

著書『あわいゆくころ 陸前高田、震災後を生きる』（晶文社、2019年）
『声の地層: 災禍と痛みを語ること』（生きのびるブックス、2023年）
映像『二重のまち／交代地のうたを編む』（映像作家・小森はるかとの共同制作、2019年）など

●日時 **6月22日（土）**
開場／13時30分
講演／14時00分～16時00分（予定）

●会場 河合塾 京都校

●対象 河合塾塾生、中高生・高卒生およびその保護者

入場無料・申込制

こちらよりお申し込みください▶

※教室の定員を超えた場合は、その時点でご参加を締め切りますので、ご了承ください。

河合塾 京都校
TEL.(075)252-0581
〒604-8131
京都府京都市中京区三条通東洞院東入ル菱屋町41-2

［アクセス］
●地下鉄東西線・烏丸線烏丸御池駅5番出口から徒歩2分
●阪急京都線烏丸駅18番出口から徒歩7分
●京阪本線三条駅から徒歩12分

河合塾